

■全体を通しての学び、連想など

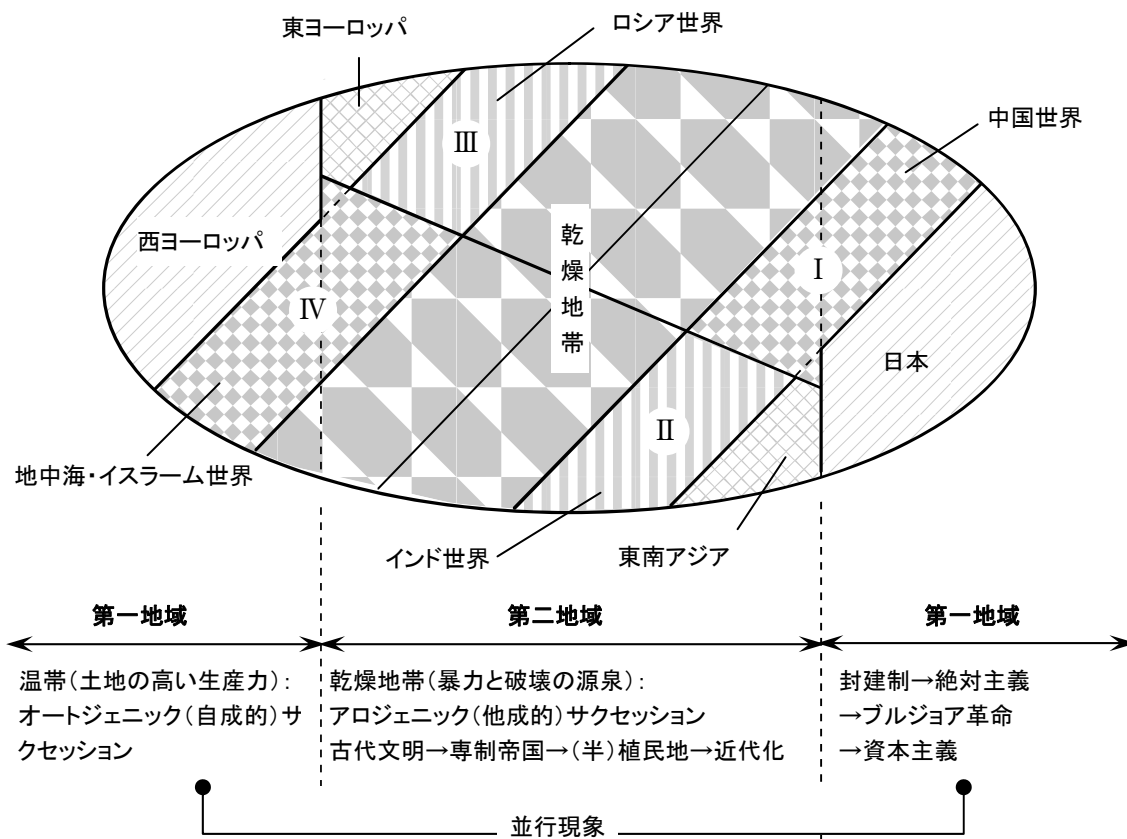


図1 第一地域と第二地域の幾何学的分布 [本文を元に、合同会社5W1Hにて作成]

■現在の自分にとって、特に学びとなった部分

- ・進化ということばは、いかにも血統的・系譜的である。～わたしの意図するところは、共同体の生活様式の変化である。それなら、生態学でいうところの遷移(サクセション)である。[p.119] 一定の条件のもとでは、共同体の生活様式の発展が、一定の法則にしたがって進行する、とみとめたところに、サクセション理論が成立した。[p.119-120] サクセションという現象がおこるのは、主体と環境との相互作用の結果がつもりつもって、まへの生活様式ではおさまきれなくなつて、つぎの生活様式にうつるという現象である。～主体・環境系の自己運動ということだ。条件がちがうところでは、運動法則がちがうのは当然である。[p.121] →弊社ニューズレター第98号：優れた経営者・リーダーは「ベストプラクティス」を鵜呑みにしない などでの主張と通じる部分がある。
- ・歴史というものは、生態学的な見かたをすれば、人間と土地との相互作用の進行のあとである。べつなことばでいえば、主体環境系の自己運動のあとである。その進行の型を決定する諸要因のうちで、第一に重要なのは自然的要因である。そして、その自然的要因の分布は、でたらめではない。それが幾何学的な分布をしめしているのである。[p.216]
- ・明治以来の日本の文化の発展は、歴史の法則の、必然的な展開にすぎないのであって、文明の

改宗とか、西欧化とか、いべきものではなかった、ということになる。[p.115]

→人間の歴史の法則といったものが存在するとして、それを理解するには、線形思考的な「進化史観」よりも、図1（幾何学的に表した旧世界）に示したような、主体と環境の相互作用を重視する「生態史観」を用いる方が、適切に思えることがあると感じました。（別途、「交流史観」などの切り口も重要だと思います。）本書を読んで初めて、「歴史と地理（史観と地図）の補完関係」のようなものを感じることができました。

- ・知識人としての立場と、政治的実践人としての立場が、武士階級においては統一的に両立していたのであります。[p.181] 現代における知識人の文明史的地位を要約するならば、それは、現代の高度産業社会の展開によってもたらされた一種の不適応グループであり～。その言論は、しばしば、いわゆる進歩的ないしは急進的なかたちをとりますが、～しばしばブレーキとして作用することがおおい。意外に、保守的あるいは場合によれば反動的役わりをはたすグループであろうかとおもいます。[p.186-187]

→弊社ニューズレター第112号：「イノベーションのDNA」と、専門領域に依らない「質問力」を踏まえて、「経営者」について考えると面白い！

- ・宗教のアナロジカルな現象として、ここにあげたいのは、病気、とくに伝染病である。[p.303] 流行病というのは、風土病すなわち endemic な病気に対する概念で、後者が、ある局限された地方に長期にわたって持続的にみられるのに対して、前者は、短期間に急速に伝播するのを特徴としている。～両者は条件次第で相互に転換することがおおい。[p.306] いっぺんエピソードな宗教の波にあらわれた社会は、ある種の免疫性を獲得するとかんがえるのである。[p.326]
→当日の議論で出てきていたように、宗教（…伝染病との類似点が多い）の蔓延の背景には、先の見えない社会不安との関係もありそう。

- ・トインビーの「歴史の研究」は～、文明についての個体モデルを骨子としている。～著者（梅棹忠夫）は個体の集りとしての群落のサクセッションな展開をモデルにみたてている。～木の一本一本は死んでも、森はその個体の寿命をこえて、生きつづけ、灌木林から喬木林にまで遷りかわってゆく。もちろん樹種構成や遷移（サクセッション）の速度、遷移のパターンは、環境におうじ、初期条件におうじ多様である。外から別種の木をもちこんでも、森の条件は変ってくるかもしれない。[解説：谷泰（文化人類学者、京都大学名誉教授） p.344]

■相互啓発を通して学んだ事柄

- ・「本書は、各地を日本人ばかりのグループで回っていたら書けなかっただろう。異なるバックグラウンドの外国人と一緒に回ったから書けたのではないか。」という K さんの発言が非常に大切だと感じました。

→「生態史観」を踏まえ、後天的な学習では、どんな場に行き、どんな情報に身を晒し、そこにいる人々とどんな相互作用を及ぼし合うかを、主体的に選ぶことが大切。

以上